

マガモ雌の所謂「雄化」4例

黒田長禮

昭和35年5月17日受類

鴨類中、雄が雌の羽装に変つた例は私は未だ実見したことがないが、雌が雄に似た羽装に変つた例、即ち「雄化」の例は色変型 (colour variant) に比し大いに稀ではあるが、応々現出するものである。

私の知るものは四種の鴨類 (マガモ・コガモ・オナガガモ・オシドリ) にかような例を見た (黒田, '39)。これらの内で今回はマガモ (*Anas platyrhynchos platyrhynchos* L.) についてのみ記述する。

第1例。東京羽田鴨場 (現在の羽田空港の一部に当る) で、1927年4月23日に捕獲し、1935年迄8カ年間飼育したもの。この例では体色は雄に酷似し、頭頂及び側に緑色部があり、顔は大部分バフ色を有した。中央尾羽は捲上る。嘴は雄の如く緑黄色ではなく、橙黄色に黒色大斑あることは雌の嘴と全く同じである。永く飼育中も毎年冬に見られる生殖羽は同様に現われ、唯頭と頸側の緑色を増すが、顔は緑色とはならなかつた。体の大きさは各部共雌に等しく (測定値のノート焼失)、鳴声は始め雌声であったが後には中間声を発した (標品焼失)。

第2例。千葉県手賀沼にて1936年12月に捕獲され、著者が飼養した。捕獲当時既に雌の雄変たる徴候があり、体色は第1例の雌に似ていた。即ち顔はバフ栗色で、眼の後方から上頸に達する一大緑帯がある

外は、雄成鳥と異ならない。前頸の半白輪は極めて明瞭で、その巾 11.5 mm に及ぶ (普通雄では平均 8—10 mm あるのみ)。特に注意されたことは、嘴が雄と同様に緑色が主であることであり、詳細に書けば、上嘴は淡帯緑オリブ色に鈍褐色斑があり、前半及び会合線の前半は汚橙黄色を帯び、下嘴は帯黄橙黄色である。体は面白いことに雄と各部が同大であることである。其の後飼育を続行中、換羽毎に雄の羽色を増加したが、顔と喉とは最後迄、雄の如き美緑色とはならなかつた。鳴声

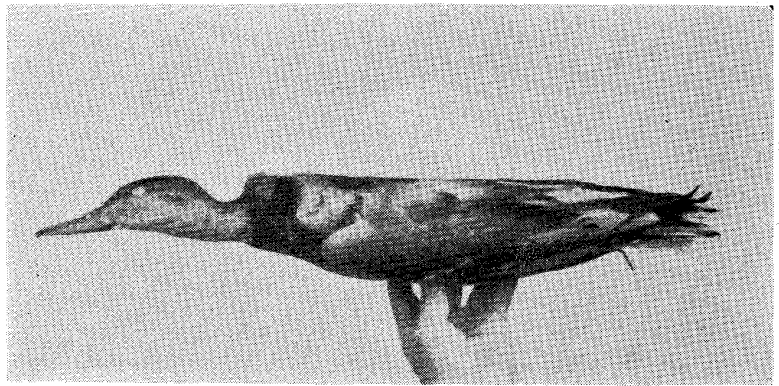


Fig. 1 マガモ 間性

千葉県手賀沼にて採集 (本文第2例標本) マガモ雄と同様で顔だけ淡色のもの、体は大型

は雄に近いが、雌の如き音もあり、中間声であつた。生態的には雄の態度をとり、他のマガモ雌と1番となつて生活したが、交尾はしなかつた。毎年夏には正常の雄と同じようにエクリプスの羽装となつた。

この鴨は山階博士の懇請により1945年5月18日山階鳥類研究所にて解剖に附せられ、その結果は山階博士 ('48) によつて公表された。それによると左右の卵巣は精巣へと反転の状にあり、役に立たない輸卵管も存在していた。気管は雌と全く同じで、骨球 (bulba ossea) は全くなかつた。この雄化即ち同性の剥皮は同研究所員故三上源三氏により仮剥製とされ、目下私の標品 (no. 15777) として保存している。

第3例。千葉県新浜鴨場で、1939年3月24日に捕獲され、著者が飼養した。これは雌の雄変と思われたが、始めは雌に近かつた。其の後飼育した処、換羽毎に次第に雄の羽装を完備し、1944年秋の換羽で完全の緑頭の雄と見るべきものとなかつた。併し虹彩は暗褐色、上嘴は橙黄色の地に1大黒斑を具え、脚趾は橙赤色で、体は雄より遙かに小さく、鳴声も亦雌と同様でなつた。生態上の態度は常に雌と変らなかつた。しかし毎年夏には矢張りエクリプスに変化することは誠に面白い現象であつた。

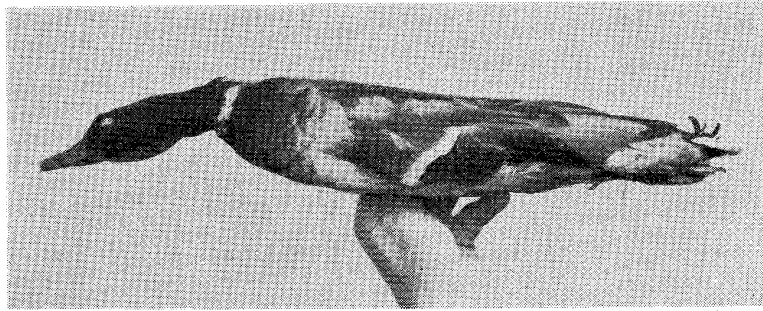


Fig. 2 マガモ 間性

千葉県新浜にて採集 (本文第 3 例標本) マガモ雄と外観は異なる。嘴は有斑 (雌型) 体は小型。

のものである。これは第 1 例の記載に殆んど一致するもので、頭頂から後頸並びに眼の後方は緑色、顔の大部分はバフ栗色、前頸はバフ色を主とする。暗色の過眼帯があるので、淡色の眉斑を残すけれども、これに

緑色小斑が交つていて、不判明の眉斑となる。その他、体の背面は雄と同様であるが、一体に暗色で、色が淡くない。白頸輪は充分発達している。上胸の赤栗色部には多くの暗色小点が散在する。これは第 2 例の手賀沼産の場合よりも著しく、グリーンランド産キタマガモ (*Anas platyrhynchos conboschas* C. L. BREHM) を想い起さしめる。腹面には褐色の雌の羽が可なり残っている。中央尾羽は捲上る。嘴は第 1 例及び第 3 例と同じく雌型で、斑紋も雌そのままである。脚は橙赤色で少々淡い方である。鳴声は中間声であり鳴き方は雄と同じ態度を示す。平常雄の態度を持ち、他のマガモ雄成鳥をも

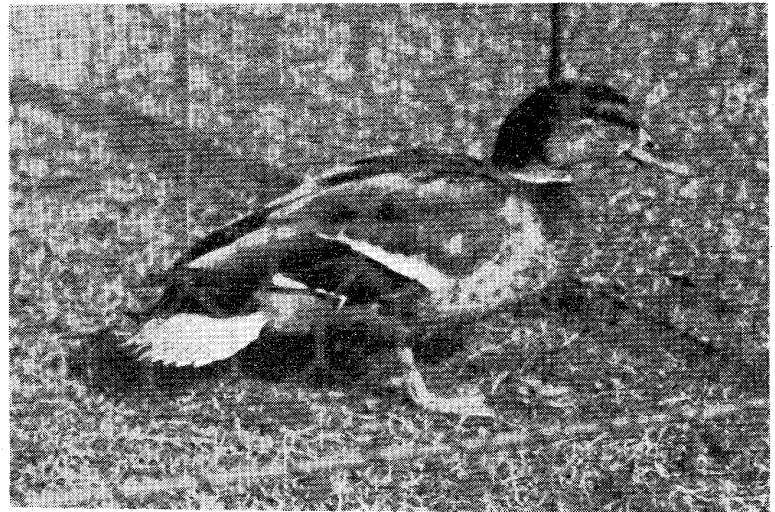


Fig. 3 マガモ 間性

埼玉県埼玉鴨場にて採集 (本文第 4 例, 目下飼育中) 嘴に雌斑あること、顔の淡色の外は雄と異なる。体は小型

追ひ振う位の強さも見るときがある。しかし体の大きさは各部共第 3 例に等しく全くの雌の大きさである。次に測定を比較する (単位 mm)。

例	採集地	採年月日	調査日	全長	翼	尾	跗蹠	露出嘴峯	白頸輪巾	尾羽数	備考
1	羽田鴨場	23. iv. '27	標品焼失
2	千葉県手賀沼	xii. '36	18. v. '45	540 in skin	275	83	46	55	11.5	不足	山階報告 no. 421
3	同 県 新 浜	24. iii. '39	17. v. '45	510 in skin	245+x	82	43.5	48	7.5	不足	同 no. 420
4	埼玉県越ヶ谷	3. iii. '60	4. iv. '60	505	250	83	42	48	7.5	19	目下飼育中

以上を見るに、第 1 例は標品焼失。第 2 例は大きさ全くマガモ雄に一致するもの、即ち私の調べた多数の普通雄の測定 246 ♂ 全長 536—620 mm, 翼 245—290, 尾 79—99, 跗蹠 42—51.5, 露出嘴峯 48—64, 白

頸輪巾 7—22, 尾羽の数 18—20 枚。

第 3 と第 4 例とは共に大きさ全く雌マガモの測定範囲内に入り, 全長は寧ろ少々小さいことを示す。私の雌の測定では 220 \pm 全長 520—600, 翼 239—275, 尾 76—96.5, 跗蹠 39.5—48, 露出嘴峰 43.5—60.5, 尾羽の数 18—20, 筋 21 枚。

第 4 例によく似て頭の緑色が少なく, 白頸輪が飼育数年中に消失したのとしてナキアヒル (*Anas platyrhynchos* var. *domestica* form. *naki* KURODA) に 1 例が知られる (榎山, '26), またアヒル (*A. platyrhynchos* form. var. *domestica erecta* DÜRIGEN) にも現われたことがある (黒田, '39)。

文 献

- 黒田長禮 '39 植物及動物, 7, 1951. ————— '39 雁と鴨, p. 45, no. 84. 榎山徳太郎 '24 鳥, 4, 235. ————— '26 鳥, 5, pl. 3. 山階芳麿 '48 生物, 3, 81.

Résumé

Notes on Four Examples of the Female Mallard Assuming the Male Plumage

Nagamichi KURODA

In Japan there have been collected only four wild specimens of what we call the Female Mallard assuming the male plumage. Among these intersex specimens, no. 2 example which came from Teganuma, Chiba Prefecture, was studied by Dr. Yamashina ('48) and was found to have had its right and left ovaries turned into testes. Concerning the remaining examples the same phenomena have been seen in the old females, such as the Mandarin Duck, the Teal and the Pintail, which must have been brought about by the shrinkage or some other disorder of their ovaries. *Blubba ossea*, an organ belonging to trachea, peculiar to the male duck, does not exist in these intersex specimens and proved not to be affected by means of sex hormone.

会 記 I

日本動物学会中国四国支部昭和 35 年度山口例会

昭和 35 年 5 月 28 日午後 1 時より下関市吉見町水産講習所中央図書館で開かれ次の講演が行われた。

1. ユスリカ幼虫の唾腺系に対するピロカーピンの作用 吉松 広延・三好 紀夫 (山口大・文理生)
2. ムラサキウニ及びバフンウニの染色体 西川 昇 平 (水産講習所)